

博士学位論文審査要旨

2013年6月17日

論文題目： 『新古今和歌集』の配列に対する修辞技巧の役割
—歌枕・体言止め・本歌取りを中心に—

学位申請者： ジョルダナーノ・ジュセッペ

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 岩坪健

副査： 文学研究科 教授 廣田收

副査： 文学研究科 教授 植木朝子

要旨：

本論文は、鎌倉時代初期に成立した『新古今和歌集』を、厳選された秀歌の配列に工夫を加えることで、完成度の高いひとつの作品として捉えることができる、ということを論証しようと試みた意欲的な論考である。とりわけ修辞技巧のなかから、古代和歌と対照的に中世和歌を特徴づける歌枕・体言止め・本歌取りが、和歌の配列にいかなる影響を及ぼしたかに注目し解明している。

本論文は、第一章六節、第二章六節、第三章五節、それに序文と結論、資料を加えた構成から成る。第一章では歌枕の意義の変化を踏まえ、『新古今和歌集』に詠まれた歌枕の配列について考察した。その結果、歌枕は掛詞の機能を主とするものと、物語を構築する動的な機能を主とするものとの二種類のグループに分けられ、歌枕を使った和歌が連続する場合、グループにより歌枕の役割が異なることを確認した。第二章では本歌集において、体言止めを使用する歌人の分類、体言止めを使う和歌の配列、体言止めに用いられた言葉の分析などを行ない、体言止めの和歌が連続する配列の必然性とその効果について論じた。第三章では本歌取りの定義を確定して、本歌の出典や配列との関わりなどについて考察し、同じ本歌を採る和歌の組み合わせを手がかりとして、本歌をも配慮して和歌が配列されていることを明らかにした。

本論文は、『新古今和歌集』における歌枕・体言止め・本歌取りを全巻にわたり詳細に検討し、それらの修辞技巧が和歌の配列と密接に関わることを解明した。このような考察は新たな研究の領野を拓いた独創的な試みであると評価できる。

よって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2013年6月17日

論文題目： 『新古今和歌集』の配列に対する修辞技巧の役割
—歌枕・体言止め・本歌取りを中心に—

学位申請者： ジョルダノー・ジュセッペ

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 岩坪健

副査： 文学研究科 教授 廣田收

副査： 文学研究科 教授 植木朝子

要 旨：

上記審査委員3名は、2013年6月11日、午後5時から約2時間にわたり、徳照館2階の第1共同利用室において、公開で学位申請者に対して口頭試問を行なった。

学位申請者は、審査員からの質疑応答に対して、提出論文についての専門的知識はもとより、関連する諸分野の事柄に関しても、的確かつ詳細な応答を行なった。その結果、本論文の学術的価値の高さ、および学力水準の高さが確認された。

また、語学（英語および日本語）についても、十分な理解力と運用能力、および表現力があることが認められた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 『新古今和歌集』の配列に対する修辞技巧の役割
—歌枕・体言止め・本歌取りを中心に—

氏名： Giordano Giuseppe (ジオルダーノ・ジュセッペ)

要旨：

『新古今和歌集』は二十一代集の中で最も洗練された歌集である、とはよく言われることである。周知のように本勅撰集の構想は、『古今和歌集』の理想的な継続という概念に基づいている。後鳥羽院が和歌所を開設して、数多くの歌合や歌会が催された結果、宮廷には新歌風の発端を促す環境が整えられた。このように後鳥羽院の飽くことのない歌壇活動により、鎌倉時代初期は宮廷歌風が最高潮に達したのである。

『新古今和歌集』が優れた作品であるのは、それぞれの和歌が秀作であると同時に、和歌の精巧な配列にも工夫が施されているからである。勅撰和歌集において和歌の配列を理想的に構想する傾向は、『古今和歌集』にまで遡れるが、編纂技術による達成度が最も高いのは『新古今和歌集』であると判断される。その和歌の配列こそが、当歌集の評価を高めているのである。

十世紀から十四世紀までの歌集と百首歌の配列基準を考察した小西甚一氏は、『新古今和歌集』の撰者たちは、和歌の配列が本歌集の享受者に時間の流れの印象を与えるように、和歌を並べたということを述べた。(Konishi Jin'ichi, Robert H. Brower and Earl Miner (ed.), "Association and Progression: Principles of Integration in Anthologies and Sequences of Japanese Court Poetry, A.D. 900-1350", *Harvard Journal of Asiatic Studies*, 21号, 1958, p. 67-127) 小西氏は、『新古今和歌集』の配列で他の特徴も見られると考察する。例えば、羈旅部では空間的な動きが感じられ、恋部では人間の心の動きが感じられる。要するに、『新古今和歌集』とは単なる和歌アンソロジーではなく、強い一貫性を持ち、最初から最後まで通読することが出来る優れた作品だと認めなければならない、と小西氏は述べている。

しかし、『新古今和歌集』を詳細に調べると、撰者たちが和歌の配列を決定した時、小西氏の割り出した基準(時間の流れの印象・空間的な動き・人間の心の動き)に限ったわけではないという強い印象を受ける。それは、幾つかの和歌の連続、すなわち連続的に並べられた和歌の一貫性を高める他の要素も認められるからである。特に重要な役割を果たすものは、三つあると考えられる。それらは、「歌枕」と「体言止め」と「本歌取り」である。その修辞技巧の痕跡は古代和歌にも見られるが、いわゆる「新古今時代」をその修辞技巧の最高峰と見なしてもよからう。そこで、その三つの修辞技巧を、各章で論じることにする。

まず第一章では、『新古今和歌集』における歌枕の役割を取り上げる。それを明らかにするために、『新古今和歌集』で詠まれた歌枕の一覧を作成し、これをもとに以下の二点を調査した。

- 1、代表的な歌枕の特定、およびそれらを詠みこんだ和歌の特徴について。
- 2、歌枕の和歌の配列に対する役割について。

この調査の結果、歌枕は基本的に二つのグループに分けられることが分かった。一つ目は、掛詞を作りやすい「鳴海」や「嵯峨」のような歌枕のグループであり、二つ目は地理的な特徴のある「須磨」や「吉野」などの歌枕のグループである。

特に興味深い点は、どのグループの歌枕が詠まれているかにより、それぞれの連続した和歌の調子が変わるという点である。より詳しく述べると、一つ目のグループに属する歌枕を使う和歌の連続には反復的な印象が認められる。そのため、このような和歌の連続はかなり静的な連続である。それに対して、二つ目のグループに属する歌枕を詠む和歌の連続は、傾向としてよりダイナミックな印象を与える。このような場合、編纂者たちは、何度も同じイメージや雰囲気を繰り返さなくても、物語の時間的な流れを十分に感じさせることができたようである。それだけに限らず、そのような和歌の連続では、すべての和歌をまるで一人の理想的な歌人が詠んだかのように感じられ、その歌人の気持ちの動きと心の移り変わりも意識されるのである。

次に第二章では、体言止めを取り上げ、第一章と同様、本歌集の配列に対して体言止めが与えた影響を明確にするため、次の二点を調査した。

- 1、『新古今和歌集』の和歌を中心とする、新古今時代の歌人の、体言止めに対する態度。特に、体言止めの技巧としての必要性和、八代集との比較による、それまでの歌人の用法との相違点。

- 2、『新古今和歌集』における体言止めに用いられた単語の具体的用法および体言止めを使う和歌の統語論的構造。

この調査の結果、例えば、文中の単語・語群の配列様式とその機能の調査を通じて、統語論上構造が共通する和歌が連続的に並べられる場合は単調な和歌の配列になるか、あるいはダイナミックなそして感動させる和歌の配列になるか、といった点が明らかになり、体言止めと和歌の配列との関係もより明らかになった。『新古今和歌集』では、体言止めを使う和歌はほぼ全て新古今時代の歌人の和歌である。さらに、体言止めと自然界には密接な関係があるということも明らかになった。

これらを証明する具体的な根拠としては、三つのデータが挙げられる。一つめは、体言止めを使う和歌の大部分は四季部に収められていることである。二つめは、一つめのデータの当然の帰結であるかもしれないが、連続的に並べられ、体言止めを使う和歌の大半も四季部に撰入されていることである。三つめは、体言止めの語句として使われる言葉の内に、自然界（動物・植物・天象）に関する言葉が、どの巻においても圧倒的に多いということである。

最後に第三章では、本歌取りを中心に考察した。本歌取りは、『新古今和歌集』の配列の仕組みを研究する上で、歌枕や体言止めよりもいっそう興味深いものである。なぜならば、本歌に使われた前時代の和歌に関する意識について、より明確に調査できるからである。第三章では、次の二点を論じた。

- 1、それまでの歌集（特に私家集と勅撰集）が本歌取りによって『新古今和歌集』にどのような影響を与えたか。

- 2、撰者たちが和歌の配列を決める際、本歌取りは重要な要素であったかどうか。すなわち、本歌取りは和歌の配列にどのような影響を及ぼしたか。

『新古今和歌集』における本歌取りを考察した先行研究はあるが、しかし、本歌取りと『新古

『新古今和歌集』の和歌の配列との関係を明らかにした研究はこれまであまりない。

この調査の結果として、次のことが明らかになった。

- a 『新古今和歌集』で本歌取りを使う和歌は、五一四首に及び、全体の四分の一余りである。
- b 『新古今和歌集』における本歌取りの使い方を考察すると、本歌の出典のなかで、当時の歌人から特に好まれたのは『古今和歌集』である。
- c 「体言止め」と「歌枕」の修辞技巧と同様に本歌取りも、『新古今和歌集』の少なくない箇所では決定的な要素となる。
- d 『新古今和歌集』では、同じ本歌を採る和歌の組み合わせが幾つかある。これらについては、編纂者らが組み合わせの基盤として本歌を利用したということが考えられる。

以上の考察により、『新古今和歌集』における和歌の配列の仕組みを分析して、撰者たちの方針意図を明らかにするのが、本学位論文の目的である。調査の結果、『新古今和歌集』の和歌の配列に対して、これまであまり研究対象とされてこなかった要素である歌枕・体言止め・本歌取りが、かなり重要な要素であることが解明されたのである。